

泡
1

巨大
建造

たとえば全部動作で脳は奪われ何？

巨大な駅に付着するように街があり街には人が棲むのだから列車が増え駅は肥大し街は巨きくなる。もうどこから街でどこからが駅なのか誰にもわからない。人には街で役がありそんなものとは言つてのける馬鹿は全員死んだか、どうか。

ここに二人いる。名をイパ塚とアゾ基^{もと}。イパ塚は駅の威容をくぐり抜け階段を降りていく。コンビニ向かい地下道の入り口には光る緑に白抜きの人^もが走る。逃げる向きが逆じゃないかな、とイパ塚は思う。どうなんだろう。それとも、こちらで合っているとしたら。

自分の周りを見渡してみても、ちゃんと人が付いてきているか見る。ちゃんというね。

イパ塚の傍らをアゾ基が行く。黒いコートをタイトに着込み、その足取りに脚はなくひとり軽やかでずるい、浮いている。事実として。そんなことを思いながらイパ塚は前日無理を言つて分けてもらった配給のバター棒を詰め込んだ鞆が重く肩に食い込む様子様子様子を、と昨日遅くまで三十六本ある足の指の爪を切り揃えていたせいではなかな寝られなかったことを後悔する。階段はあくまで規則的に段差をつくり単調なリズムを生み出しこれではと思つて不規則に二段飛ばし三段飛ばししてみる。ではこの段を飛ばす見た目の不規則さは何に由来するものか。広大な脳の中には乱数ジェネレータの任

を帯びた小人の一族が棲まう、こういう嘘は無限後退してくれお願いだからという情念に由来する。

すこし思考が解けていくのをアゾ基は自分でも感じている。

ずっと歩く。

壁は濡れて目地の隙間に苔が茂っている、のをアゾ基の小さな手が撫でていく。やはり小さな頭をあちらへ向けたまま、

やけにいそぐね

と言う。足音はたたない。浮いているから。

ねえ

イパ塚は、オキナワのことを考えていたので、出遅れる。オキナワとは、むかし南の果てに浮かんていたあたたかい地であるらしく、イパ塚はそのことをアゾ基に聞かされたことがあったのだった。

そんないそいでるふう

うん

それって便利

浮上の原理をアゾ基に教えてもらったことはないし、訊いたところで、なるべく頭を空っぽにして軽く、とかそんな類の返答だろう。

まあね。

覚られを気にせず振り返ると、すでにかなり遠くなった地上の明りはもうコンビニから漏れ出した蛍光灯の光なのかよくわからない、ただの点に収斂して、オキナワは遠いところで、あの光の点と同じくらい、そんなふうなこ

とも思う。

駅のなかを進んでいくのは巨きな芋虫の体内を歩くみたいだった。人のすれ違えないほど狭い道の照明は一筋続いているのみで、突然光明が途切れたところから、外観と一致しないほどの大空間が出現する。どこか遠くから重くなくか蠕動するような音が響く。だいじょうぶ。イパ塚は声に出さずに言ってみる。なにかでさえなかつたら大変だった。まだここはほんの入り口だし、もっと奥のキオスクまで行ったこともある。小さいころ、父にねだって宇宙を買ってもらったことを、今でも思い出す。その宇宙も周囲のエントロピーを無闇に上げる生来の特質の所為で失くしてしまった。かなしいけれど、いちばんありふれた、もうとつくに裡側は絶対零度付近で安定している老いた宇宙だったから、きつと今この手に取り戻したとしてもなにひとつかつてと変わるところはないはずだった。

道の途中、何度もプラットホームを横切った。

列車を待つ人の脚が目線の上に移動する。イパ塚たちはゴミ箱の横に掘られた細い階段道を降っていく。標高は知れず、またそれとは関係なく気温が乱高下する。死なない程度に暑かったり死なない程度に寒かったり、排熱と吸熱の錯乱した入り組みに二人が水槽に着いたところには疲労が全身から吹き出していた。

水槽は明るく清潔なカフェの厨房にあり、客は三世紀前に途絶えている店

には祖父が所狭しと押し込められていた。祖父たちは剥落した皮膚で濁る水の中言葉にならない動きを動く、疲れだけではない、二人はしばらくのあいだ水と老体を眺めていた。

どれがいい

どちらかがが訊く。

どれってなに

どちらかが応えた。

イパ塚は腕まくりして、祖父のひとりの顎を掴み引き揚げ、口を開かせる。祖父は引きしぼられた空気を一筋吐いた。同様にして次々と口の中を視る。結局、もっとも歯の残っていたのは最初に引き揚げた祖父だった。

なんで

だって歯並びが良いほうが良い暮らししてたってことじゃない

イパ塚は応え、ステンレスのシンクに祖父を抱きかかえて移す。祖父は銀の細いフレームの眼鏡を掛けていた。乾いた布巾でレンズに残る水滴を丁寧に拭いてやる。すぐに祖父の皺たれた表面は乾いていく。肉はもうほとんど付いていなかったが、腹だけはふっくらと卵に満ち満ちている。

ごめんねおじいちゃんいくよ

とイパ塚は言い、膨らんだ腹の頂点にゆつくりと体重をかける。祖父は声を漏らすまいとして口元を一文字にきつく結んでいる。油染みたオープンの前に凭れるアゾ基は所在なげにして、作り置きのアイスコーヒーなどちびちび舐めている。

いい気なもんだ終わってるからって

アゾ基は口角を一瞬、ふわりと上げてみた、ようにイパ塚の周辺視野は視る。

アゾ基の視線が祖父の総排泄口に注がれ、にちりにちりと任意の球体が表面を現した。蛇口をひねり流水でゆすぐ。ぬめりを取り眼鏡を拭いたのと同じ布巾で水気を取る。その間にも腹へ圧力をかけるのを忘れない。

アゾ基ねえ手伝つてよ

任意の球体が全部で九つになる頃には祖父も産みの苦しみに慣れ、口元にうつすらと笑みを浮かべるまでになっていた、ようにイパ塚は視る。

えー、あたしのときはこんなグロくなかったもん

アゾ基は立つ場所をすこし変えただけで、なにも手を動かそうとはしない。最期に薄まった透明な粘液が排泄口から流れ出て、祖父はその場で膝を抱き屈葬のような姿勢。

さむい、さむいよ

祖父の声はこの一瞬だけ人で、またすぐ無意識の靄に覆われた。

はは。嘘つくなよだつてこいつら駄じゅうの神経が除去されてるんだぜ

アゾ基は演技っぽく言う。

まあ、痛いとか苦しいとかみてるこつちの話だもんね

どうしようもなく、と声を小さくイパ塚は付け足した。

で、これからどうすれば？

訊いてみてはじめて、これは途方にくれているのだと腑に落ちる。イパ塚はまっすぐアゾ基を向き、その脚と腕の切除された跡のきれいな姿態を再度確認する。

うーん、それ卵だろ、喰うんじゃねえの、ゲラゲラ

まじめに

えあ。ほんとうだつたら大使館に届けに行くのがスジらしいんだけど、まあそれはビギナー向けでなし省いちやつていいんじゃない

ごめんわからない

すすすすとアゾ基が平行に擦り寄ってきて、球をない手で指差せない。まあまあ二個ほど下のほらオーブンに入れてさ、あとの三つを飲み込む膾でも可。で残り四つどうするかつてえと自由だ自由。ほんとうの自由はけっこうむつかしいぞ。むしろそれをどうするかがイパ子の充足者としての一步を決めるであろー

と長広舌のアゾ基に、

ははっ、なにそれ魔法の類かよ

とイパ塚は言ってみる。

そうだよ。なんだお前科学だとしても、発達しすぎた科学を間違えてとかじゃない、そうだよ純然の魔法だよ舐めるなよ。もうその球を体内に入れたときからあたしたちの仲間入り、この駅も街も全部朽ち果ててもひとり独立独歩で歩いていける、あつあたし腕脚ないけど、そうしてこの前の星が終わったときから承らえてきた、この宇宙が全部冷えて何ひとつ特筆するようなイベントが起こらなくなってもあたしたちは歩いていける。よかったね。

アゾ基はどこかうれしそうにして、五体の揃ったイパ塚は自分の両手を交互に握っては開きを繰り返しながら確かめる。

そして電話が震え、イパ塚は粘液にまみれた手をスカートの裾でぞんざいに拭いポケットの奥から電話兼メモパッド兼ポスト兼郵便局兼百科事典兼百貨店兼電卓、つまるところ表示領域の大きい薄型の計算機を取り出し、

あちよつとまつてたぶん

と呼び出しに応じた。

あもしもしマ、おかあ、うんうん、いや、そうだよ。えおじいちゃんのところ、じゃないよなに(い)つてんのいま学校よお、あれ登校日って言つてなかったじゃあい言った。うん。ああ、あの土器は棚にそのように、え、蟲が、じゃあかえるまでに始末しといてお母さんそういうの得意ジャンルじゃない、え、じゃないの？ この手のディスコミュニケーションが不幸をね、ああ。まあいいや、はい。あお父さんは部屋に入れないでねだからってはい。頭蓋は消え去り何？ ほほん。夕方までにはかえります。へ、へへっへ。いや塩でいいよ岩塩で。紅いの。うん、うん。はい、じゃね切るからねぷつり、と機械は言わず、イパ塚が自分でつぶやき会話の終わりを示す。いまのだけ

アゾ基の掌には二つの白球が乗り、互いに互いを追いかける円軌道を描い

ている。擦れ合い鳴る高い音をイパ塚の頭が補完する。実際に球と球は触れ合っているのではない。

知らないひと。母と自称してはいたがそれなにしてるの

それはこわいこれは健身球、の真似事

ああ中国の、さいきん多いんだよね無作為に電話かけてなにかのふりする誰か

開口一番さよならすればいいのに

アゾ基の意見ももつとものように思えたが。

ああ、以前そしたら本物でさ。一悶着あった

わからないものなの

電話の音声って録音をそのまま流してるじゃないんだって、もとの声になるべく近くなるように向こうで用意した素材を組み合わせてるだけだって

へえ雑学だね

健身球ほどではないとおもう

会話が終わり、旅が始まる。銀の業務用オープン是十分に大きく開けば油の黒い焦げ付きが靄のように拡がっている。

アゾ基の手渡した白い球をイパ塚は飲み込もうとしてえずく。アゾ基に手はなかったのではないか、さつきからなにかおかしくなっているなと思っても、言い出せない。それどころでなくくらい嘔吐感が鳩尾から込み上げてくる。こんなことをみなみなさん耐えているのか、いや違ったこれはレア体験苦しみの最前線に立っていると思ひ直しながら溢れ出る唾液の奥の唾液腺が痛む。アゾ基が背中をないはずだった手でさすりなかつたはずの指先の示す先にはオープンの黒い染みがある。焼かれ食べられなかつたものの先にあるんだよ、いままでこのようにして食い散らかしてきた設定の行き着く地が。

そこは海に囲まれ温暖で、モチが常温で蕩けている、もしかしたらお前の失くした宇宙も漂着しているかも、もしかしたらおまえの切った三十六片の足爪も、全部の祖父も、自ら捏造し続ける母たちも。みんなたのしく暮らしをしたとき。なにそれ炬燵の中みたいと思う。オキナワだって言ってるのほら。わたしたちみたいなのが行き着くんだよ見て。よく見て。よく見てみて。黒い靄は晴れあがり風いだ浜辺に刺したバラソルの下汗をかくて溺れそうなオリオンビールの瓶を持って踊るアロハシャツのアングロサクソンの男、遠近法を無視して伸ばす手にシェイクハンドプリーズと書いてあるような顔、じつは男は単に巨大であるだけで、足元の砂浜の砂はよく視れば漂着した無数の球、あまりの量が気持ち悪く球を吐き出しついに新生の申請はリジェクトされる、ふわりとその場を離れたアゾ基の本体は隣の宇宙に置いてあって因果を絶した超越幸運機関による偶然の通信がアゾ基の軀をオキナワの基地へと帰還させる。存在しない手を振れないアゾ基に手を振り見送って元来た階段をすこし登りキオスクの脇から出た最寄りのプラットホームの伽藍で各駅停車を待つ。朝湿度は高く気温は低く人の姿はまだ疎らだ。方角はざっくり南、五十ヘルツで明滅する配管の情報量生青い光はまだLEDに換えられてはいない。いまはなにも考えなくてよい時間、たとえば全部動作で脳は奪われ何？

泡
1

二〇一七年一月二〇日初版

著者 巨大 建造
発行者 巨大 建造
発行所 全人出版 肉の智慧派
千〇〇〇 〇〇〇一 千葉県柏局私書箱二億号10係
〇円
頒 価

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社までご送付しないでください。送料小社負担にてお取り替えいなどとはできない。おれは無力だ……

©Kenzoh KYODAI 2017 printed in earth